わが家のおひなさま

野田市の郷土博物館に集合

オブラートに包むように、記憶の中に大切に生き続けてきた「わが家のおひなさま」。それが日の目を見た。

郷土博物館の呼びかけに応じ40ほどの、「わが家」代表のお内裏様が、晴れ晴れしく飾られている。妍を競うなどという趣はない。優雅にひっそり並ぶ。それぞれに提供者のコメントがつけられていて、それを読み、お内裏様を眺めれば、「わが家」まで垣間見ることができそうだ。

「76年前に母の実家からもらいました。ちょうど戦争に重なって幼少時にはひなまつりをすることもありませんでしたが…」

「昭和51年生まれ、祖父母が送ってくれたそうです。うづらの卵に顔を作り、薄焼きの卵で着物を作った人形を飾り桜餅を食べました。母となった今も続けています」

「35年前に私が作った木目込みのおひなさま。息子二人のわが家でしたので、幼稚園のお友だちを招待。そのうち孫ができました。おひなさまっていいものですね」

内裏様を眺め、コメントをじっくり読んでいる婦人がいた。「ご熱心ですね。わたしも2回目の見学に柏から来たんですが…」と話しかけ、感想を聞こうとしたがやめた。じいさんでは興をそぐ。

男女高校生の一群が入場する。一挙に現代語の世界である。高校生の感想を聞くのも結構だろう。でも食指が動かない。

右上の、女学生が見ているのは当館蔵の「有職雛（ゆうそくびな）」。江戸時代後期に公家の間で好まれたひな人形。

3月21日（月祝）まで　火曜休館　入場無料

末広クラブ・逆井漫歩156　平成23年2月